

# 「みんなが主役、やねだんの地域づくり」 柳谷公民館のこれまでの取り組みについて

地域の福祉力を  
高めるセミナー

過疎集落「やねだん」再生の仕掛け人

豊重哲郎氏の講演から地域づくりを学ぶ

平成23年2月2日(水)、沖縄県総合福祉センターゆいホールにおいて、地域の福祉力の向上を目指すことを目的に「平成22年度地域の福祉力を高めるセミナー」を開催しました。当日は、多くの民生委員児童委員をはじめ市町村社協、自治会、福祉施設・団体の役職員、行政職員など350名が参加し、住民の支え合い活動による地域づくりについて学びました。

## 「みんなが主役、やねだんの地域づくり」 柳谷公民館のこれまでの取り組みについて

「父の日」、「母の日」、「敬老の日」の朝、住民たちが集落内放送にじつと耳を傾ける。町外に暮らす子どもや孫からのメッセージを地元の高校生が代読し、集落全体に心温まる感謝の言葉が響き渡る。

母への感謝、祖父への想い、小さな故郷への愛情を住民らで共有し合うひと時。その仕掛け人が、平成8年から柳谷自治公民館館長に就任した豊重哲郎氏である。

就任当時、豊重氏は55歳。鹿島県の大隈半島中部に位置する鹿島市串良町の柳谷集落(通

称やねだん)では、人口300人、65歳以上が4割の高齢化と過疎化が進む限界集落目前の状況だった。

### 感動で仲間意識を底上げ

公民館長を任された当初、豊重さんが活力を失った集落を何とかしなければという思いで手がけたのが荒地を公園に甦らせるというものだった。予算が潤沢にあるわけでもないなかで、集落で出来ることは、集落でやっつけていこうと行政に頼らない地域づくりは公園作りから始

まった。

豊重さんは言う「初めから住民全員が協力的に作業に参加するものではなかった。そんな時は、命令せず率先して自ら動くこと。」荒地放題の土地で作業する豊重さんの姿を見て、協力の輪が広がり、半年で「わくわく



▲地域づくりに何が大切かを熱く語り伝える豊重氏

運動遊園」という自前の公園が出来上がった。その達成感と感動の一体感で仲間意識を底上げできた地域づくりは成功だという。自分たちで公園を作ったことで住民たちのやる気を引き出すことが出来た豊重さんはその後、休耕地を利用したサツマイモ栽培や土着菌づくり、土着菌を活かした農作物や焼酎作りと独自の商品作りで自主財源を増やしていった。

### 地域づくりに タイムリミットはない

様々な取組みで成果を出し、収益金で高齢者のための緊急警報機を設置したり、

子ども達には無料の寺子屋塾を開き、ついには住民にボーナスとして現金が支給されるなど、やねだんの画期的な取組みは、全国各地から注目を集めた。

豊重さんは地域づくりに必要なキーワードに「自主」を

掲げ、自主的な住民の総参加と自主財源が重要だという。総参加とは、汗を流し共に労働する「結」と、動けなくてもアイデアや提案なら出来るという「知恵」による参加方法がある。「やれる人たちだけでやったところで、土台は出来上がらない」と強調する。

地域づくりを「あわてるな、近道するな」と自分自身に言い聞かせ、例え1%の反目者がいたとしても放っておかず、彼らへの働きかけをあきらめない。「円満な人づくりの輪は、説得ではなく納得。納得させるのは感動しかない」として、心に訴える方法を考える。

### 文化向上と 子どもがキーワード

また、110日提言として、地域づくりにおける子どもたちの重要性を豊重さんは訴える。土日や祝日などの休校日が年間110日ある。つまり、この110日は子どもたちが地域にいるということ。小中学生が地域づくりの原点として、本物の感覚と意志



れる成長時期の子どものための交流の場や地域活動の場を設ける。親や祖父母へと子どもを軸に大人への波及効果も期待できるところが子ども活動の強み。

そして、もう一つの秘策は文化の向上。過疎化を食い止める対策として、集落の古民家を再利用し「迎賓館」と名づけ、移住者を募るも、条件にアーティストと限定。移住してきた画家や写真家、陶芸家たちの創作活動と住民生活が交流し、集落の一部にギャラリーや美術館が点在する集落からは、地域の豊かさや人びとの心の潤いが垣間見える。

こんな所に住んでみたい、と思う人が増えることで、やねだんの人びとに誇りが生まれる。豊重さんが14年の歳月をかけて再生したやねだんの事例から、住民を動かすためのヒントを数多くもらった講演であった。



## 沖縄の小地域福祉活動の現状と課題

### 小地域福祉活動実態調査報告をもとに

#### 4割の世帯が単身世帯に

無縁社会の進行に大きく影響する要因として、少子高齢化とともに単身世帯の増加があるが、国立社会保障・人口問題研究所によると、単身世帯は二〇三〇年には約四割の世帯が単身世帯になると推計されている。

#### 小地域福祉活動に 取り組む社協8割

平成21年度の本会調査によると、41市町村社協のうち、地域ネットワーク活動、ふれあい・いきいきサロン活動、その他の小地域福祉活動のどれか1つでも取り組んでいる社協が34社協(82.9%)となっている。



調査報告を行う  
神里博武氏

そのうち小地域ネットワーク活動は12社協で取り組まれ、837

ネットあり、ふれあい・いきいきサロンは26社協で409サロン、ミニデイサービスは22社協、429ヶ所であった。

#### 取り組みが進む ふれあいサロン

沖縄にはほとんどの地域に字・自治公民館があることも影響し、ふれあいサロンやミニデイは多くの地域で取り組まれている一方、小地域ネットワーク

活動は特定の市町村に偏り、低調である。今の無縁社会を考えた時、小地域ネットワークの取組みの充実強化が不可欠である。

#### 小地域ネットワーク 活動の課題

高齢者や障害者と活動の対象者に広がりを見せているが、子育て支援のネットは少なく、児童虐待問題の深刻化を考えると

地域の福祉課題に 대응するネットワークの構築が必要である。

#### ふれあいサロン、 ミニデイの課題

ボランティアの育成や看護師等の専門ボランティアの確保やマンネリ化する活動内容の見直し、男性参加者の拡大などが課題としてあがっている。

#### これからの小地域福祉 活動を進めるために

小地域福祉活動を通して、地域住民の絆が強化され、福祉コミュニティの形成が図られることが調査結果からも分かる。「助けられる人」、「助ける人」の区別が無い「お互いさま」の精神がこれからの福祉であり、ある程度の「おせっかい」は必要。



### ことば解説

#### 小地域福祉活動とは

自治会・字レベルの小地域で地域ボランティアが主体となって展開している福祉活動。小地域ネットワーク活動、ふれあい・いきいきサロン活動が主である。

#### 小地域ネットワーク活動とは

支援を必要とする個人や家族の安否確認や見守り活動を住民やボランティア、在宅福祉サービスの専門家等の協働により行う活動。自宅を訪問して支援する訪問型。

#### ふれあい・いきいきサロン活動とは

高齢者、障害者、子育て中の親等とボランティアが公民館や集会所、個人の家などに一緒に集ってレクをしたり食事をしたりしてふれあう活動。